

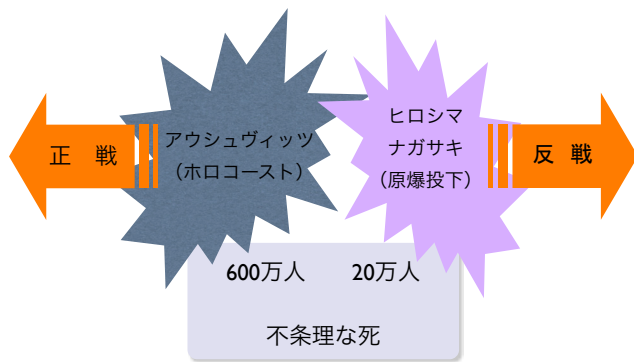
キリスト教と平和・戦争

3.11以降の時代の中で

Overview

- 20世紀の世界戦争の傷跡
- 21世紀の戦争
- 戦争論の三類型
 - 絶対平和主義、正戦論、聖戦論
- 3.11以降の平和構築の課題
- まとめ

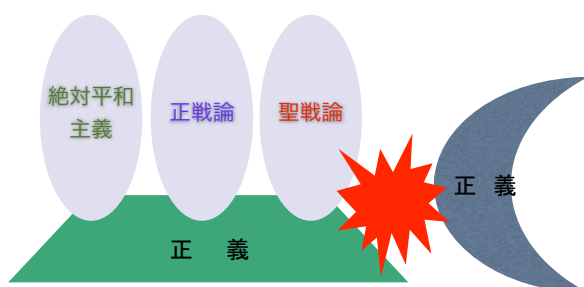
20世紀の世界戦争の傷跡



21世紀の戦争

- 「テロに対する戦い」 (war on terrorism)
- 直接的暴力の封じ込めだけではなく、**構造的暴力** (政治的・経済的・軍事的抑圧、貧困等) に対する中長期的な洞察が必要とされる。
- ナショナリズムが引き起こす緊張関係
- 世俗的ナショナリズム：国家同士の覇権の衝突
- **宗教的ナショナリズム**：宗教的原理主義の興隆

戦争論の三類型



絶対平和主義 (pacifism)

- 「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」 (「マタイによる福音書」 5:38-39)
- 「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」 (「マタイによる福音書」 5:43-45)

アガペーの中の暴力性

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」

(「マタイによる福音書」 10:34-37)

平和主義から正戦論へ

- 「コンスタンティヌス体制」(313年、ミラノ勅令)以降、絶対平和主義の考え方は、徐々に主流から傍流へと移行していく。
- アウグスティヌスが正戦論の基礎を築く。
- 絶対平和主義は、ワルド派、カタリ派、メノナイト、クェーカーなどの少数派を通じて受け継がれていく。

正戦論 (just war theory)

戦争への正義

(*ius ad bellum*)

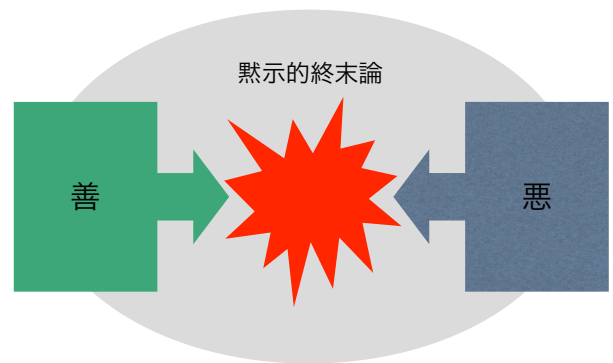
- (a) 正当な理由
- (b) 正当な権威
- (c) 比例性 (結果として得られる善が戦争という手段の悪にまさる)
- (d) 最終手段
- (e) 成功への合理的見込み
- (f) 動機の正しさ

戦争における正義

(*ius in bello*)

- (a) 区別の原則 (戦闘員と非戦闘員を区別する)
- (b) 比例性の原則 (なされた不正を正すのに必要以上の力を行使しない)

聖戦論 (crusade, holy war)



3.11以降の 平和構築の課題

中沢新一 『日本の大転換』 (集英社新書、2011年)
を素材として

原子力と一神教

- ほんらい生態圏には属さない「外部」を思考の「内部」に取り込んでつくられた思考のシステム、それはほかならぬ一神教 (モノテイズム) である。「第七次エネルギー革命」の産物である原子力技術の、宗教思想における対応物が一神教なのである。(30-31頁)

神々と「神」

- 一般的な神々：「山や川の女神であったり、動物界を支配する神」
- 一神教の神：「**抽象**そのものの神」「**環境世界の外部**にいて、そこから世界そのものを創造した神」（32頁）

神々の世界

- 「**媒介**」による思考は、じつに繊細で、複雑で、美しい世界の本質を理解できる。そこでは、悪や病でさえ、生態圏の構成要素である。絶対的な善などは、ここにはない。しかし生態圏が自然状態にあるとき、全体は**美しい秩序**を保ち続ける。（33-34頁）

一神教の神

- 一神教はその生態圏に、ほんらいはそこに所属しないはずの「**外部**」を持ち込んだのである。モーゼの前に現れた神は、**無媒介**に、生態圏に出現する。そんな神を前にしたら、生身の人間は心に防護服でも着装しないかぎり、心の生態系の**安定を壊されてしまう**だろう。（36頁）

不安定の原因

- 一神教が思考の生態圏に「外部」を持ち込んだやり方は、原子核技術が物質的現実の生態圏にほんらいそこに所属しない太陽圏の現象を持ち込んだやり方と、きわめてよく似ている。思考の型としては、まったく同型である。一神教出現以前の人類の宗教は、生態圏の閾域の内部でおこなわれてきたが、一神教の出現とともに、そこ生態圏に所属しない神が組み込まれることによって、人類の宗教には**不安定が持ち込まれた**。（36-37頁）

一神教的な技術

- このような意味で、原子力技術は一神教的な技術であり、誤解を恐れずに言えば**ユダヤ思想的な技術**である。（38頁）

考えるべきポイント

- 一神教の神：生態圏の「外部」とは？
- 一神教は、生態圏に「外部」（神）を「無媒介」に持ち込む思考なのか？
- 自然状態にある生態圏を「美しい秩序」と見なすことは可能か？

応用的課題

- 天地創造の始まりに「光あれ」（創世記1:3）と言われて輝き出した光と、1945年、ヒロシマ、ナガサキの上空で輝いた光と、2011年、フクシマの原子炉の中で暴走した光の間の違いは何か？

知識の利用範囲

- モーゼの神体験を援用して、神を**外部化・超越化**するより、エデンの園における神の人間に対する語りかけ（創世記2:16-17）に注目すべきではないか。
- 「善悪の知識の木」とは何か？

- 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、**善悪の知識の木**からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」（創世記2:16-17）
- 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。（創世記3:4-6）

歴史的・文明論的考察

- 近代日本においては、天皇神話によって、すべてが「媒介」された「美しい秩序」が形成された。
- その秩序は、ヒロシマ、ナガサキへの原爆投下によって終焉を迎えた。
- 3.11の東日本大震災によって、日本は再び原子力エネルギーの恐怖を刻印された。問題を一神教に押しつけ（問題の「外部化」）、多神教的な自然秩序を礼賛することは、適切な文明批評と言えるだろうか。

「創造」の再考

- 消費と廃棄を配慮しない「創造」は、21世紀の循環型社会にふさわしくない。
- 創造と安息の倫理的課題
 - 神は、天地創造の第七日目に「すべての創造の仕事を離れ、安息なさった」（創世記2:3）。
 - いかなる資源・エネルギーについても、その「安息」（最終処理・循環）を考えなければならない。

まとめ

- 宗教と暴力・平和の多様な結びつきを洞察する。
 - 暴力が起こされ、抑制される諸条件の考察
- 一神教的な考え方と多神教的な考え方を排他的・敵対的にならない形で関係づける。
- 科学的知識の安全な運用のために、倫理的・宗教的価値規範の普遍的側面を追求する。